(1) 『筑波日本語研究』 第二十号 筑波大学 人文社会科学研究科 日本語学研究室 2015

国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（4）

劉 玲

本稿は、中田祝夫編抄物大系（勉強社、一九七七年）所収の、国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』（影印本）を底本として使用する。当該抄物の成立、資料的価値については、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（1）」（筑波大学人文社会科学研究科『筑波日本語研究』第17号）と「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（2）」（同18号）を参照されたい。本稿では、前記の二稿に引き続き、主として、抄中に引かれた漢籍及び幻雲抄に集成している五山僧の諸家に注目し、それをできる限り明記して、幻雲抄を解読する際の手がかりになるようつとめる。なお、翻刻・校注上の諸事項については、前記の二稿に詳しいが、要点また前記の二稿において説明していない事項について記しておく。

一　翻刻の範囲を底本の一七二頁から一八四頁とする。

一　基本的に、原典テキストが写された方形の枠線の後に置かれている抄文の部分を翻刻の対象とする。若干、その枠線内及び枠線外の周辺に書き込んだ　小文字書きの抄文が存在するが、影印本で判読しにくい箇所が多いため、本稿では翻刻しないことがある。

一　漢籍の引用が見られる場合、その書名、または篇目名や章節名、作者名に　線で記す。例えば「幻按　唐詩正音　送隠者一篇　為杜■詩　唐音遺響　送宋処士　秋思二篇　為許渾詩」（一七二2）、「刘後村云　杜牧佳句自多　於唐律中　常寓少拗峭　以矯時弊　云々」（一七二12）、「第一句　与韋莊下第題青龍寺　千蹄万轂一枝花要路無媒果自傷之句相似」（一七三10）、「嵩明教詩　客去清談少　年高白髮饒」（一七三19）など。若干、「同游　第三四句　白髮三千丈　縁愁似个長　意同」（一七九12）とあるように、書名などの情報がいっさい記されていない場合、引用文の最初の部分にのみ　で記す。ただ、今回、主として『国学宝典』網絡版（http://www.gxbd.com/）、「中央研究院漢籍電子文獻瀚典全文檢索系統」（http://hanji.sinica.edu.tw/）、『中国基本古籍庫』（黄山書社出版）を検索資料として使用することにし、一々原本で確認するに至っていない。中には、書名未記載だろうと思われる場合が若干見られるが、今回は特に記さない。例えば、一七九4～5にあるように、漢籍の書名が記されていないが、『国学宝典』によれば『詩話総亀・前集』

巻三・狂放門、また『尭山堂外紀』巻三十四・唐に同様な記事が確認できる。書名未記載の場合については、拙稿「『三体詩幻雲抄』を通してみる室町時代における漢籍流布の状況」（筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』55号）においても言及しており、参照されたい。

一　前記の検索資料に比較した際、引用された漢籍の文章において、誤記だろうと思われる箇所も見られる。例えば、「大明一統志」から引かれる「昔舜南巡崩葬蒼悟　二妃娥皇女英尋之……」（一八四 17）においては、「蒼梧」を「蒼悟」に誤植されたり、「詩話捻亀」から引かれる「後二年而群玉逝　段哭李詩曰酒裡詩中三千年　縦横唐突喧々……」（一八一 4）においては、「縦横唐突世喧々」とあるべきところに「世」字が脱落したり、「才子傳」から引かれると思われる「上曰　且令［二］徃試　［一］観［レ］之　至　果有有治声」（一八一 2）においては、「有」は一つ衍字であったりすると見られる。ただ、それら漢籍の底本がまだ明からにしていないため、今回特に改めず、底本の通りに写す。

一　幻雲抄に集成している五山僧の諸家の説については、次のように｜線で記す。例えば「幻云　今始テ　ヒツコム者ヲ　送歟…」（一七二 6）については、「幻云」（月舟寿桂の説）の横に――線を引く。また、「補講　續翠講云　饒ハ　人ノ物ヲ　賣買ニ　マケルヲ　饒ト云也」（一七三 17）については、「饒ハ…」より以降はおそらく「補講」（横川景三の説）において「續翠講云」（江西竜派の説）が引かれていると見られるような箇所について、「補講」並びに「續翠講云」の両方に――線を引く。ただ、「桃抄　或説ニハ　ユルスト　読ハ　ワルイソ」（一七四 12）にあるように、「或説」より以降は先人の誰かの説であろう場合が若干あるが、僧名が記されておらず、今回は特に記さない。ほかに、「或曰」（一七二 1）と記された場合が若干あり、同様に処理する。

一　漢字については、底本の形態を重んじ、異体（略体・俗体を含む）の文字をできるかぎりそのまま写す（末尾「異体字一覧」に掲げる）。そのまま再現できない場合は通行体に改めるが、一々説明しない。例えば、「漁隠」（一七二 1）・「晝夢」（一七五 1）など。なお、一部誤読を招きやすいものについては、【　】内において通行体の文字を（　）内に入れて記すことがある。また、若干□で示し、【　】内に【「日*寸」（時）や「衣+几」（裔）のように示す場合があり、*印はその二字を左右で組み合わせた文字を、+印はその二字を上下で組み合わせた文字を意味する。なお、初出以降は特に一々記さない。

一　小文字で二行書きにしてある箇所が少なく、「／」印で改行を示す。例えば、「注云管簫　管仲／簫何也」（一七四 14）とあるのは、「簫」字から改行している。

一　仮名については、「子」を「ネ」に改めず、そのままに写す。合字では、「〆」を「シテ」に、「丶」を「コト」に改める。

一　踊り字については、漢字の場合は「々」に、仮名の場

合は「丶」に統一する。なお、仮名二つ以上の場合は、「今世間ノ体ヲ ツラツラ見ル二」（一七四 3）のように繰り返して写す。

一 振り仮名はそのまま写す。

一 濁点は、若干あり、そのまま写す。

一 返り点と一・二点は、それぞれ「レ」と[一]・[二]のように記す。なお、若干、「又如我等[一]賤者ヲモ」（一七四 5）や「有[二]與疑[レ]年」（一七六 7）とあるように、一点のみまたは二点のみで、片方が、落とされているか不鮮明で確認できないような場合がある。底本の通りに写す。

一 転倒符、書入れ指示、挿入符については再現できず、【 】内において説明する。

一 見せ消については■で示し、【 】内において説明することがある。

一 その他

・ 頁数は底本のそれに従い、漢数字で記す。また、あらたにアラビア数字で行数を記す。

・ 句読点は特につけず、底本の朱点により一文字分をあけることとする。なお、破損や墨汚れ、または不鮮明であるため、判明できない場合に、校注者の判断による。

・ 漢字や仮名について、破損や墨汚れ、または不鮮明であるため、判読できない場合に、□で示す。推測されるものがあれば、それを□の中に入れる。

・ その他の説明事項があれば、【 】の内に記す。

一七二

1 送[レ]隠者 或曰 此篇非許渾所作 々者乃杜牧也 自城西至秋思 皆杜牧作也 補云 漁隠 自城西訪友人別墅至秋思【篇（篇）】【この行まで「送隠者」原典テキストが置かれている】

2 以上皆曰作杜牧詩也 幻按 唐詩正音 送隠者一篇 為杜■詩 唐音遺響 送宋処士 秋思二篇 為【■「特」見せ消、右傍に「牧」。「杜牧詩」にすべき】

3 許渾詩 又許渾丁卯集載秋思 送宋処士二篇 不載其餘詩 吹尽桂花枝 作吹落桂花時 須臾□【□「古+文」（事）】

4 作須臾過一作事 秋思作秋日 枕簟作蓐簟 湘水作湘月 又東坡詩十五 此身自断 ■天休[レ]問 白髪年【「尽」見せ消】【「休」左傍に「メヨ」。「休メヨ」と読むべき意か】【華（華）】

5 来漸不公 注 縯曰 杜牧詩 公道世間云々 廿五 従来白髪有 [二]公道[一] 始信丹経非 [二]妄言[一] 注曰 杜牧詩 公道【廿（二十）】

6 世間云々 幻云 今始テ ヒツコム者ヲ 送歟 又モトカラ ヒツコウテ 用アツテ 出テ 又皈 去ヲ 送歟

7 才子傳 許渾 字仲晦 履歴 作用晦

8 無媒云々 全篇言於世上功名之路 無媒 故□土荒人稀之地 皈隠也 蓋有才不見用者 皆逃于山林江湖也【□「ム+虫」（雖）】【蓋（蓋）】

9　雖然古伊尹耕于有莘之野　殷湯致幣聘之　太公釣于渭水之濱　周文同輿載之　今則不然　惟白髮有

10　公道　雖貴人不相饒也　第一句　与韋莊下第題青龍寺　千蹄万轂一枝花　要路無媒果自傷之

11　句相似　瑞松云　小人滿朝　賢人雖在野　無人進之　蓋從古然也【「瑞松」右上「村菴」】

12　刘後村云　杜牧佳句　自多　於唐律中　常寓少拗峭　以矯時弊　云々　愚謂　拠此論　見送隱者□　牧之詩【刘（劉）】【□（艹＋寺）（等）】

13　必矣　雖然　案唐詩遺響三　宋処士皈山并秋思詩　許用晦詩也　可考【并（並）】

14　漁隱叢話後集十五云　牧之云　無媒径路草蕭々　自古雲林遠市朝　公道世間惟白髮　貴人頭上

15　不曾饒　羅鄴云　芳草和烟暖更青　閑門要路一時生　年々點検人間事　惟有春風不世情　余嘗以此二詩【曾（曾）】

16　作一聯云　白髮惟公道　春風不世情　蓋窮人不偶　遣興之作也　又漁隱叢話後集十五　許彦周詩話云　牧之

一七三

1　題桃花夫人廟詩　細腰宮裡露桃新　脉々無言度幾春　至竟息亡縁底事　可憐金谷墜楼人　僕嘗【「息」右傍に某字見せ消】【廟（廟）】

2　謂此詩為二十八字史論

3　無媒――上古　朝市山林一也　自傳岩召傳説　自渭濱召太公　是也　自中古以来　雲林市朝相遠　不用雲林之士而

4　有此隱者　唯白髮不擇貴賤而已

5　続翠講云　饒字　商人詞也　物ヲカウ時ニ　商人ワ　ヲシム　コナタワ　ソエヨト　請也　ユルストハ　不可讀之　音ニ可讀也　貪【翠（翠）】

6　富ニヨラス　死スル事ハ　同ト　ナクサメタソ　一二句ヲ　破テ　云也

7　淵云　第二句　杜詩　所謂文章一小技　於道未［レ］為［レ］尊之勢也　意与句面相反也　微昂語也　天地同根　萬物一体　古【淵（淵）】

8　今之理也　況於其中　説雲林　説市朝　有何差別哉　然今世之人　以之為隔　可悲也　此慰隱者之語也【況（況）】

9　聽雨云　表　叙無人境　裏含嘲弄之意也　朝廷官位　謂之路　蓋無謀于求官位　而退隱草蕭々之処【「之」「路」間に挿入符あり、左傍に「逕」。「謂之逕路」にすべき】

10　於是　隱者發憤云　自古雲林遠市朝　則何恨無媒哉　自古二字　含千古之憤也

11　海蔵虎関点云　公道世間云々　所謂公道之世間　天地理之所指也　天地之間　公道者白髮之所致也　世

12　間乃白髮之世間也　猶如醉郷也【醉（酔）】

13　村云　此詩ハ　二句ハカリ　隱者ニモナル也　其餘ハ　許渾カ　身ニ　カケテ　云也　サルホトニ　許渾ハ　時ニモ　不遇歟　朝廷ニ　通

14　スル路モ　無媒　フミワクル事モ　ナケレハ　草荒蕭

々也　朝廷エ　通スル要路ノ　事也　不曽饒ハ　世話也
商賈
15 ノ物ヲ　是ヲハ　マケヨト云ハ　饒字ヲカク　商人ノ
マケサルヲ　不曽饒ト云ソ　白髪ハ　公道ニテ　貴人
ニ■モ【「ニ」「モ」間に「テ」某字見せ消】
16 マケスシテ　頭上ニ　生スルソ　桃抄　唐土ノ　説話
ニ　商人ノ物ヲ　賣買トキ　ソエヨ　ソエマイト云ニ
不曽饒ト云ソ
17 補講　續翠講云　饒ハ　人ノ物ヲ　賣買ニ　マケルヲ
饒ト云也　詩ハ　言人ト云テ　マケモ　セスシテ　白
髪多生也　一義云　饒ハ　カキル也　此義【「言」「人」
間に挿入符あり、右傍に「貴」。「言貴人」にすべき】【續
（続）】
18 亦可也　漁菴点云　不[二]曾饒[一]　々字作[二]
多字訓[一]也　言公道世間者　白髪ト思ヘハ　ソレサ
エ　不[二]公道[一]シテ　貴人頭上
19 ニハ　白髪不多也　嵩明教詩　客去清談少　年高白髪
饒
20 張楷和云　松関落木正蕭々　清夢無縁到市朝　流水遶
□山近屋　孤吟終日与偏饒
21 幻云　門無行媒迹　草木行憔悴ト云格也　人ノ往来ナ
イ　故ニ　ハキアクル事モ　ナイソ　故ニ　路ニハ　草
ヲイシケツテ【「門」右傍に「谷詳」とある】【往（往）】
22 有ルソ　隠者ト　朝廷ト　別ナコト　ヲ云ソ　自古―
―今始テ　カウアルテハ　ナイソ　古カラ　カウソ
23 聽雨義云　含千古之憤也　桃抄　ナニサマ　此隠者ハ
世間朝廷ムキヘハ　媒カナイソ　サルホトニ　世間ヘ
ノ　径路ニハ　草深ク
24 ヲイシケリテ　人ノキカ　ヨウ　事モ　ナイト　云心
ソ　サルホトニ　隠者ノ　イル　雲林ト　朝廷トハ　サ
カリ　隔ルソ　桃抄ニ　遠ド【「遠」左傍に「サカル」】

一七四

1 チエモ　ヨマウソ　幻云　自古ト云ハ　底心ハ　昔ハ
カウハ　ナカツタト　云心アルソ　上古ハ　朝市　山林
一也　邦有道トキハ　如此
2 賢人君子ノ野ニ　アルヲハ　呼出シテ　挙用タソ　サル
ホトニ　朝市山林ハ　一ニシテ　無[レ]二也　今時代
ハ　サワナイ　隠者ヲ　召出サルヽ
3 トモ　キコエヌソ　万事何事モ　私ト　見ヘタリ　隠者
ニ　賢才アル人ヲハ　呼出事ハ　ナイソ　今世間ノ体ヲ
ツラツラ見ルニ
4 世間ニ　公道ナル■者カ　唯一アルソ　此白髪ト云者ハ
イカナル　王候貴人ヲモ　ヘツラワス　チツトモ　ユ
ルサス　頭上
5 エ　ヲイアカルソ　得[レ]時得[レ]処権柄在[レ]
手　人ヲモ　又如我等[一]賤者ヲモ　平均ニ　無
[二]差別[一]　白髪ニ　成スソ　チツトモ　貴
6 人　頭上テ　云テモ　ヲイヽテモ　イハヤ　世間ニ　公
道ナモノトテハ　只白髪ハカリト　云ヘハ　世間ノ　公

道ニモ　ナイト　云ニ　成ソ

7　海蔵義ノ心　幻云　尽天下ハ　皆私アリ　白髪ノ　世間ハカリカ　公道也　醉郷ツレソ　許渾

8　続翠講云　饒字ハ　商人詞也　桃抄　補云　不曽饒ハ　世話也　物ヲ　ウリ　カウ□ニ　マケテ　マツト　ソエヨト云ニハ　饒字ヲ【□「日*寸」（時）】

9　カクソ　イヤ　マケマイ　ソエマイト　云時ニ　不曽饒ト　云ソ　漁菴点云　不［二］曾饒　［一］　幻云　白髪モ　不［二］公道［一］　我カ　如キ　不

10　□□思フ者ハ　早ク　白髪スル　貴人ハ　無［レ］愁ホトニ　白髪モ　ナイソ　是所以不公道也　明教詩　見于前

11　東坡カ　白髪年来漸不公ト　作タ　是モ　亦翻案ノ法也

12　桃抄　或説ニハ　ユルスト　読ハ　ワルイソ　添加スル心チヤ　ホトニ　不［二］曾饒　［一］ト　ヨマウソ　イカナル　貴人頭上テモ　アレ　ヤワヤ　ソエヌ　事ハ

13　アルト　云心ソ　第一句与韋荘下第題青竜寺詩　見于前　漁隠集十五　牧之云　无媒――云々【「十」右傍に「後」。「漁隠後集　巻十五」にすべき意か】

14　和云　拂袖長歌傲管蕭　西風蘭棹已辞朝　怪来昨日帰心急　恰是蓴鱸秋正饒　注云管蕭　管仲／蕭何也

15　左襄云々　晋　絳縣正月甲子朔四百四十五甲子云々　七十有三年矣　史趙曰　亥有二首六身　下二如身　是其【縣（県）】

16　日数也　士文伯曰　然則二萬六千六百有六旬也　山堂考索前　四十三

一七五

1　才子傳　許渾　字仲晦　潤州丹陽人　云々　後晝夢登［レ］山　有［レ］宮闕凌虚　問曰　此崑崙也　少頃遠見数人方【晝（昼）】【この行まで「送宋處士帰山」原典テキストが置かれている】【虚（虚）】

2　飲　招［レ］渾就［レ］坐　暮而罷　一佳人出［レ］箋求［レ］詩　未［レ］成　夢破　後吟曰　暁入瑶臺露氣清　庭中惟見許【氣（気）】

3　飛瑤　塵心未［レ］断俗縁在　十里下山空月明　他日復夢　至山中　佳人曰　子何題余姓名於人間　遂改

4　為［二］天風吹下歩虚　□［一］　曰　善矣　云々　幻謂許志［二］于仙術　［一］者也　然則此詩　抑［二］処士之義［一］　非也　三四句蓋羨［三］【□「士+巴」（声）】処士逢［二］神仙　［一］也　又有［三］許渾贈［二］王山人詩　［一］云　近来□説焼［レ］丹処　玉洞桃花萬樹春　又寓［二］歆艶之意　［一］也【□「米+耳」（聞）】

6　賣薬――續翠云　薬与琴ハ　山人足也　薬ハ　度世之用也　琴ハ　写心之用也　然山林ナレハトテ　不食シテハ不可叶　琴

7　モ　破タラハ　何郷ニテ　可修チヤトホトニ　人間ヘ出テ　賣薬也　其在人間　久帰不故ニ　山中桂花枝ヲ　ハ

山風吹【「久」「帰」間に挿入符あり、「不」右傍に転倒符ある。「久不帰」にするべき】

8 尽シソ スルラン 晩節ハ 大事也 桂花可落ト 云テ 今帰也 君在山中看碁 則我豈可得再遊 逢我言【節(節)】

9 惜別也 君子不尊独善 而尊兼善也 故為君子者 又不尊隠者也 隠者若不不［レ］看［レ］碁 則為【碁(碁)】【若不」、「不」左傍にヒ。「若不看碁」にすべき】

10 賣薬可再来 然則 我亦得再會也 二之句 速帰兒【會(会)】

二 聽雨云 賣薬字雖不雅 ■下有琴字 則以修為尊雅也【「可」見せ消】

一七六

1 賣薬云々二句 言宋処士賣薬用其所得修琴 故皈山甚遅 於是 旧叢桂花亦為山風破吹尽也 雪本【遅(遅)】

2 世間云々二句 言世間日月須臾之間相過 如王質久不可看碁也 蓋言暫来塵世 則雖攸愛之

3 桂花 亦相忘 豈在仙家重可思塵世乎 是即督皈之心也 本集 事作過 雪本

4 山風云々 松花謂 桂花雖仙家之花 為山風落尽云 則儒家者流 攻異端之心也 雪本

5 甲子襄三十年 左傳曰 三月癸未 晋悼夫人食 輿［二］人之城 ［レ］杞者 林曰 輿 衆也 城杞在前年 至是晋悼

6 夫人為之享食 以酺［二］其労［一］ 食音似 絳縣人或年長矣 無子 林曰 以无子息 故自受役而往 林曰【无(無)】

7 向自受役 故今亦自往受享 有［二］輿 疑［レ］年 林曰 将有所与 見其年老 疑其年 使之年 林曰 使言其

8 年 曰 臣小人也 不［レ］知［レ］紀［レ］年 林曰 老人荅曰 言臣乃小人也 不暁紀年之法 臣生之歳 正月甲子朔 四百有四十【荅(答)】

9 五甲子矣 林曰 但記臣始生之歳 所称正月 謂夏正月 朔日甲子也 自始生 至今 凡歴四百四十有

10 五甲子矣 其季於今之一也 林曰 其末至今日 自甲子 甲戌 至癸未 凡二十日 故為三分六甲之一也【「今」「之」間に挿入符あり、右傍に「三」。「今三之一也」にすべき】

二 博聞録辛集 修琴 古琴冷而無［レ］声者 用布囊炒［レ］沙罨 候冷易［レ］之数次 而又作［二］長甑［一］ 候有風日 以甑【博(博)】

12 蒸［レ］琴 令［レ］汗-溜 取出吹軋 其声如旧 琴久無［レ］新旧 常罷［レ］床上 近人氣被中尤佳 琴久而不鳴者 繃定一処【軋(乾)】

13 以［レ］桑葉捋［レ］之 鳴亮如旧 王篇無繃字 毛晃有繃字補耕反 包束也 詩會繃悲萌切 束也 或作繃

14 淵云 処士借居於許渾 今又去乎 古云 不作良相

可作良醫　処士採薬　以活人命　琴亦風流具也　山風
言不【醫（医）】
15　帯人間風塵氣　桂　言非凡花也　或出或処　満面清風
16　聽雨又云　第二句　弄処士　吹尽字　言未得駐顔術也
17　爛柯山　一名石室　又名石橋山　在西安　乃青霞第八
洞天　晋　樵者王質入此山　忽見橋下二童子対■【■某
字見せ消、右傍に「奕」】
18　所以持斧置　坐而観　童子指示之　曰　汝斧柯爛矣
質皈　見郷閭已及百歳云　勝覧第七衢州部
19　大雅集　張以寧題爛柯山効宋躰　人説仙家日月遅　仙
家日月轉堪悲　誰将百歳人間　只換山中一【「間」「只」
間に挿入符あり、左傍に「事」。「人間事」にすべき】
20　局碁　甲子　支干始也　挙其始　則計幾捻在其中
也　盖借用左傳只言歳月【「則」「計」間に挿入符あり、「幾」
右傍に転倒符ある。「則幾計」にすべき】
21　大般若　五百四十八音義云　三十須臾頃為一晝夜
22　送宋処士――村云　此詩ハ　処士カ用アツテ　山ヲ出
テ　城中ニ来テ　今又山ニ帰ルヲ　送ル詩也　杜牧カ詩
許渾カ詩ノ
23　論　見于前　何ニ此詩ハ　渾カ　丁卯集ニハ　載タソ

一七七

1　賣薬――注　招隠――招テ　隠ルヽ心ト　云義モアリ
サレトモ　招［レ］隠ヲ　方ニモシタソ
2　甲子ハ　左傳十九巻ニ　見ヘタソ　此詩テハ　甲子ハ
歳月ト云心ソ　左傳ハ　不［レ］可［レ］取ソ　支干ノ
始カ　甲子ソ　十
3　干十二支　首ヲ　挙テ　云ソ　甲ハ　十干ノ首ソ　子ハ
十二支ノ首ソ　甲カラ　始マリ　子カラ　始ルソ
4　此処士ハ　何事ニ　城中ニ　来ルソト　云ニ　処士ノ
道具ニハ　琴也　ヲトコノ　一腰刀ノツレ也　此処士宋
モ　琴ヲ　一張【「此」「処」間に挿入符あり、「宋」右傍
に転倒符ある。「此宋処士」にすべき】
5　モツカフリテ　損シタホトニ　修理セン為ニ　来ル也
琴ヲ　修スルニモ　物カ　イライテハ　ナラヌソ　此処
士ハ　山中ニイテ
6　無一物也　故ニ　山中テ　采タル薬種ヲ　持来テ　此ヲ
ウツテ　琴ヲ修スルソ　捻シテ　薬ハ　サキニ　如申
ク　処士ノ度■世
7　テ　アルソ　山林ナレハ　トテ　物不食　イラレヌソ
故ニ　薬ヲ　トルハ　処士ノ　度世ノ為也　サルホトニ
杜荀鶴カ□岳隠【□「广+戸」（廬）】
8　者詩ニモ　作ルソ　結茅遮雨露　採薬給晨昏ト　云タモ
此心ソ　処士ノ体ヲ　作ソ　イヲリヲ　スルハ　雨呂
ニ【「給」右下に「終カ」とある】
9　ヌレマイ用ソ　薬ヲ　山中テ　采テハ　朝夕ノ　マカナ
イノ用ニ　スルソ　今此宋処士モ　餘薬ノ　アルヲ　ウ
ツテ　修［レ］琴ソ
10　傳聞録ハ　見于前
11　山風吹尽――宋処士モ　出［レ］山ヲ　トキハ　ヤカ

テ 皈ント思テ アツツラウカ 薬ヲ ウリアツメ 琴ヲ 修モ ソコツニ

2 ソ デコヌソ 五日十日ト スルホトニ 城中ニ 久イタホトニ 留守ノマニ 山中ノ 面白キ 桂花ヲ 山風カ 吹落ス 此頃ノ

3 風ニ 吹落トサス 事ハ アルマイソ ヲレイ事カナ 此処士ハ 久人間ニ イテ 損ヲ セラルヽヨ サルホトニ イソイテ 皈ト スルホト

4 ニ 許渾カ 作[レ]詩送行スルソ 三四之句ハ 措テ [レ]別ヲ 云語ソ 又再會ヲ 約スル 心モ アルソ 世間甲子——宋処士皈

5 ヨ 此我等カ 人間ノ 甲子ハ 須臾刹那ノ間テ 人ノ一生ハ チラリト 過ルソ 甲子ハ 歳月ノ心ソ 仙郷日月ハ 長イト

6 キク 貴方カ マイテ 帰[レ]山ニ 仙人ノ 棊ウツハシ 見テ イラシムナ 其故ハ 昔王質カ 晋ノ時ニ 入山ニ 仙人ノ棊ウツヲ 見

7 タレハ 棊ノ一番モ ハテヌ 間ニ 斧ノ柯カ 朽テ ノクルソ サウシテ 王質カ 人間エ 皈レハ 我同時ノ人ハ 一人モナシ 死シテ 百年ハカリニ

8 ナルト云ソ 仙家ノ日月ハ 長シテ 仙境テハ ソツトノ間ト 思ヘトモ 其間ニ 人間ノ日月ハ 百年モ 二百年モ ウツルソ アレニハ 又棊ヲ

9 ウリニモ 出テ サシム事モ アラウカ マウス 如ク 仙人ノ 棊ウツヲ 見テ サウシテ 後ニ 人間ヘ 出タラハ 世間ノ甲子ハ 須臾ナル間ダ 我ハ 死シ去ソ 御尋ニ アツカルトモ 御目ニハ エカヽルマイソ 如此マウスハ 再會マウシタサニ□□ソ

21 聽雨儀ニ 売薬字 老僧持咒保梅花 上四字ハ ブタコナ字ソ 保梅花ト ツイタ処テ 雅ニ ナルソ 其[ト]同ソ

22 聽雨又云 第二句并雪樵義 見于前

23 捻シテ 儒道カラハ 仙道ヲ 嫌ソ 仙人カ 長生スルト 云モ 別タル事ハ アルマイト 抑ソ 神仙不死成何事 祇向秋風

24 感慨多ト 云テ 抑下スルソ 是儒家者ノ 常談ソ 續翠義ニハ 君子ハ 嫌[二]独善ヲ[一] 尊[二]兼善[一]ソ 独

一七八

1 善ト云ハ 君子之出ハ以テ [レ]行リ[レ]道ヲ也 其ノ処以テ [三]独リ善スルヲ [二]其身ヲ[一]也ト 柳子厚モ 人ノ仙道ヲ 学フヲ 抑テ 云タソ サルホ

2 トニ 君子ハ 不[レ]尊[二]隠者ヲ[一]也 儒道ハ 致君於堯舜 救民於塗炭ト 云カ 本意ソ 処士ハ 世間ノ 事ヲ

3 ムツカシカツテ 隠居シテ イルハ 唯我独リ 我身ヲ 善スル方ソ 君子ノ所[レ]賤也 此詩モ 其心アルヘシソ 長生[ス]ト

4 云トモ　奇特ハ　アルマイソ　桂ハ　仙家ノ花ト　云テ
貴フカ　見ヨ　ハヤ　山風カ　吹落スハソ　アレニハ
春生シテサレウス　仙人
5 棊ヲ　見テカラ　人間ヘ　再来サシモハ　我ハ　ハヤ
其時ハ　死ニ　サウス　御目ニハ　カヽリ　サウマイト
云義也　幻云　儒
6 カラ　異端ヲ　ヲサムルハ　常ノ義ソ　サレトモ　作者
ノ　平生ノ　志ヲ　見テ　詩ノ　義ヲ　可定ソ　許渾ハ
仙道スキソ
7 其子細ハ　才子傳ニ　見ヘタソ　然レハ　仙道ヲ　抑下
シテハ　此詩ニハ　云マイソ　其時ハ　只云心ハ　世間
甲子ハ　須臾ノ
8 事テ　我ハ　ソツト　可［レ］死ソ　アレニハ　仙人ニ
逢テ　長カイキシテサレウソ　ウラヤマシイソト　云
心ソ　養謂　全篇大意
9 第一番義ヲ　為優ソ　太雅集詩見于前【太（大）】
10 和云　紅塵久住念皈遅　背負焦桐跨竹枝　一到故山猿
鶴喜　松陰石上了残碁　雪本　子安【焦（隻）】
11 招隠士　逸曰　序曰　招隠士者　淮南小山之所作也
小山之徒　閔傷屈原　身雖沈没　名徳顕聞　与隠処山澤
無異
12 故作招隠士之賦　以彰其志也　向曰　招隠士者　淮南
小山之所作也　初安好事　■■八公之徒　咸慕其徳　各
竭【■■「初安」見せ消】
13 林智　著述篇章　分其辞賦　以類相次　或称大山小山
猶詩有大雅小雅也　桂樹叢生　兮　逸曰　桂樹芬
香
14 以興屈原之忠也　山之幽　逸曰　遠去朝廷而隠藏也
翰曰　桂香木　喩屈原忠良　而竄草澤　文選卅三【藏
（藏）】【卅（三十）】【この行より「秋思」原典テキストが置かれている】

一七九

1 [illegible]思　或云秋思　曲名也　琴中之曲也　或云　此詩杜牧
在京作也　蓋以神女湘妃比［二］同遊之女［一］　故云
楚雲湘也【[illegible]（秋）】
2 杜牧曾在［二］湖州［一］張［レ］水嬉　約［レ］小女
曰　十年而吾治［レ］此州　以可［レ］為［レ］妻　弊
以［レ］金帛　然十二年而治［レ］湖州　女即■【■「嫁」
見せ消】
3 嫁［レ］他夫　有［レ］二雛　作［レ］詩云　自恨尋［レ］
芳来　較遅　昔年曾看未［レ］開時　如今風擺花狼藉
緑葉成陰子満枝
4 又在楊州牛奇章幕下　与妓相戯　後為左拾遺　在京作詩
云　落魄［二］江湖［一］載［レ］酒行　細腰腸断
掌【「牛奇章」右傍に「僧孺也」とある】
5 中軽　十年一覚楊州夢　贏得［二］青楼薄倖名［一］
謂之楚雲湘水同遊乎　今當秋時愁寂記之　瞻民義也【當
（当）】
6 細腰或作楚腰　秋思　詩林万選　豪放体　作許渾詩

7 注 勝覧 建康府 無宝林寺 有上下定林二寺 又有法宝寶剰院 又有芳林 上林 桂林三苑 不載琪樹

8 旧註 杜詩 秋風動琪樹

9 雪本云 琪樹云々 全篇言時節已推移 而玉樹亦生西風 枕簟凄□ 不堪憶同遊之在楚雲湘水之間 蓋【□「ソ」*京」(涼)】

10 縁秋風而所感也 是即与少年時相反 於是自知老方至而執鏡見之 則白髪蒙頭 其情罔措

11 故歌一曲乃掩奩 査住云 琪樹指美人 西風枕簟秋 凄然也 言寵之衰也 故憶楚妃湘女之

12 同游 第三四句 白髪三千丈 縁愁似个長 意同

13 続翠講云 英雄有流年之嘆也 吾才ヲ 何日カ用ニ可立ト 思タ 玉皃ハ 風沙ニモ 勝昼図之心也 樹夏ノ

14 具足也 言ハ ウツクシキ 夏樹ノ 五月六月ニ ミルミルトシテ 如琪樹ヲ 西風纔吹 則 ソツトノマニヤカテ 秋氣生

15 シテ 八九月ノ 心カシタ 二句ハ アラ 無益ヤ何ノ用ソ 楚雲湘水辺ハ 頭巾ハ ハカリノ 同遊 友多ホトニ 我モ 其■様ニシテ【辺(辺)】【■「樹」見せ消】

16 可居ト 思タ

17 村云ニ 秋ニナレハ ウツクシク 翠ナル 玉ノヤウナル 樹モ 西風ニ 揺落シ 又夏ノ 用意 枕簟モ秋ニナレハ 棄捐シテ 用モ

18 無キ也 如此 モノスキ時分ニ 昔ノ 遊ヲ 思出ス也 琪——村又云 結構ナル 句也 一句中 言春夏秋也 与【「ス」「キ」間に挿入符あり、右傍に「コ」。「モノスコキ」にすべき】

19 友人同遊シタル 楚雲湘水ヲ 憶出也 翫雲水也 二三十年間ニ 成白頭ホトニ 鏡ヲ 見モ 無「レ」面目シテ ヤカ

20 テ 打掩テ イキヲ ホトツイテ 歌ヨリ 外ノ 事ハ 無ソ 少年ハ マサシウ 昨日ト 思タレハ 今日ハ 白頭也【「ホ」「ト」間、右傍に「ツ」。「ホツト」にすべき】

21 聽雨云 身在楚雲湘水之辺 憶昔京師同遊之人也【京(京)】

22 楚雲——才子傳 許渾 歴睦郢二州刺史 云々 幻謂楚雲湘水 謂為郢州刺史時也 本集序亦称許郢州 荊【「時也」右傍に「此ヲ 思出ソ」とある】

23 即楚也 詳見故郢城辺見落梅之旧註也 勝覧 郢州禹貢荊州之域 春秋属楚

一八〇

1 秋思 杜牧カ 詩ト 云義モ アリ 先渾カト云カ 好イソ 詩林万選ニハ 豪放体ニ 出タソ 渾カ 丁卯集ニモ 載タソ

2 秋思ト云ハ 宋玉カ 九辨ニ 悲哉秋之為氣コトト 云テカラ 秋ハ カナシイソ 又秋ハ 粛殺氣アリ 草木

黄落スルホトニ

3 カウカナシイソ　琪樹――注ニ　引クハ　文選ノ注ソ　柱　秋風動琪樹ノ心モ　樹ノ緑ナカ如［レ］玉ソ

或ハ　琪樹仙

4 境ニアル樹ソ　此一之句ハ　四時ヲ　云ソ　春ハ　琪樹カ　緑ナカ　ホトナウ　秋ニ　ナリテ　黄落スルソ　又夏ハ　枕簟テ

5 涼ヲ　招テ　臥シテ　黄昔執念西風ヲト　云タカ　ホトナウ　秋ニ　ナレハ　ハヤ　スヽミ　道具ハ　イヤニナルソ　枕――テ【「黄」右傍にヒ。削るべき】

6 夏ヲ云　其内ニ　冬アルヘシソ　丁卯集ニハ　華簟トナス　琪樹ト　云ヘハ　華簟ハ　好イソ　湘水ヲ　作湘月トハ

7 湘水カ　マスソ　春ハ　夏ニナリ　夏ハ　秋ニ　昔ノ事ハ　不［二］思出［一］ソ　衰ルトキニ　昔事カ　思ハルヽソ　渾未遂志ヲ　ヲチフレタ体ソ

8 明鏡ハ　詩テハ　明鏡ト　読ムヘシトモ　云ソ　只詩テモ　明-鏡　ソ　我カ　思コトハ　カナワヌ　次第ニ　年老ホトニ　サソ　白髪

9 スルラウ　鏡ヲ　ミルマテモナイソ　サテモ　楚雲湘水ニ　イテ　遊シコトハ　昨日ノ如クニ　思ソ　今日白髪ニナルヨ　此

10 ヲ思フホトニ　鏡ヲ　見レハ　我ナカラ　ハツカシイソ　故ニ　思ワヌ　不［レ］知　鏡ヲ　擲テ　一曲ヲ歌ソ　歌［二］一曲［一］　処ニハ　心

11 ハ　ナイソ　只思ワス　不［レ］知ニ　如［レ］此アルソ　第一之句ノ　出シヤウ　此句カ　本ソ　ユウユウトアルソ

12 瞻民ハ　杜牧カ　詩ニスル也　杜牧ハ　■■淫乱ナ者也　見于前【「杜牧」見せ消】

13 黄陵廟碑　韓文三十一日　湖　旁有［レ］廟　曰［レ］黄陵　自前-古立　以祀［二］堯之二女　舜二妃

［一］者　庭　有［レ］古碑　断裂分-

14 散　在［レ］地　其文剥-缺　考［レ］図-記言　漢荊州牧刘表景昇之立　題曰［二］　湘夫人　碑［一］

今験［二］其文［一］　乃晋　太康九

15 年　又其額曰　虞帝二妃之碑　非［二］景昇立　者［一］　秦博-士對［二］始皇帝［一］云　湘君者

堯之二女　舜妃　者也　刘向

16 鄭玄亦皆以［レ］二-妃為［レ］湘君　而離騒　九歌

既有湘君　又有［二］湘夫人［一］　王逸　之解　以

湘君　自其水神　而　謂［二］湘【「以」左傍に「ヘリ」】

17 夫人［一］　乃二-妃也　註　樊曰　屈原九歌　有湘君

湘夫人二篇　王逸注云　逸以湘君為湘水之神矣　湘夫人

篇云

18 逸注云　堯二女娥皇女英　随舜不返　没於湘水之渚

因為湘夫人　山海経曰　庭之洞山　帝　之二女居【「曰」

「庭」間に挿入符あり、「洞」右傍に転倒符ある。「洞庭

之山」にすべき】

19 之　郭璞　疑　二女者　帝舜之后　不［レ］當［三］

降［レ］小君為［二］其夫人［一］ 以予考［レ］之
璞 与［レ］王逸俱失也 堯長女娥皇
20 為［二］舜 正妃［一］ 故曰［レ］君 其二女 々
英自宜 ［三］降曰［二］夫人［一］ 故九歌 詞 謂
［二］娥皇［一］為［レ］君 謂［二］女英［一］
為［レ］帝子【宜（宜）】
21 和云 幾行寒厂暮天秋 憶昔蘇仙赤壁遊 万里月明孤
雇涙 水浮牛斗遶船頭 子安句【厂（雁）】【雇（鶴）】【船
（船）】

一八一
1 遠字 求古 大中建州刺史 又宣宗大中十二年 丞相
令狐綯挙［レ］遠杭州刺史 上曰 吾聞遠詩云 長日
【「大」字右上に「、」点が見える。「ダイ」読むべき意
か。右下より「年号 唐宣宗」とある】【この行まで「黄
陵廟」原典テキストが置かれている】
2 惟消一局棊 安能理［レ］人 綯曰 此詩人託［レ］
興耳 未［二］必果然［一］ 上曰 且令［二］往試
［一］観［レ］之 至 果有有治声 初牧
3 溢城 得［二］秦僧楊妃襪一□［一］ 珎褻呈 好事 者
李群玉校書自［レ］湖湘来過 話及黄陵廟詩 動【□
「糸*両」】【珎（珍）】
4 朝雲暮雨之興 遠曰 僕自［レ］獲［二］凌波片玉［一］
毎［レ］一-見 未曾不［レ］在［二］馬嵬下［一］
幻本
5 養案 才子傳第七 李遠 字述古 太和五年杜陟榜進士
及第 蜀人也 宣宗時 宰相令狐綯進奏擬
6 遠杭州刺史 上曰 朕□遠詩有青山不厭千杯酒 白日惟
銷一局棊 是疎放如此 豈可臨群理
7 人 綯曰 詩人托此以寫高興耳 未必實然 上曰■ 且
令往観之 至 果有治声 云々 初牧溢城 求天宝遺物
【■「是」見せ消】【實（実）】
8 得秦僧収楊妃襪一裲 珎襲 呈諸好事者 會李群玉校書
自湖湘来 過九江 遠厚遇之 談笑永日 群
9 玉話及向賦黄陵廟詩 動朝雲暮雨之興 殊亦可怪 遠曰
僕自獲凌波片玉 軟軽香窄 毎一見 未
10 嘗不在馬嵬下也 遂更相戯咲 各有賦詩 後来頗為法
家所短 魯謂 才子傳有異本否 有字異【嘗（嘗）】
11 才子傳第七 李群玉帰湘中 題詩二妃廟 是暮宿山舎
夢見二女子来 曰 児娥皇女英也 承君佳句 徽珮将
遊
12 於汗漫 願相従也 俄而影滅 群玉自是鬱々 歳餘而
卒 段成式 為 ［レ］詩哭曰 曾話［二］黄陵事
［一］ 今為［二］白日催［一］ 老無［二］
13 男女累［一］ 誰哭到泉臺
14 群玉自番禺皈 夜宿湘中 時娥皇女英神灵如夢来 朗
吟［二］此詩［一］ 授［レ］群玉曰 紅樹醉［レ］秋
色 碧渓鳴［レ］夜絃 佳期不可【灵（霊）】
15 再 風雨杳如年
16 類説二十六 麗情集 開宝中 賈知微遇曾城夫人杜蘭

香　及舜二妃於巴陵　二妃誦李群玉黄陵廟曰【「開宝」右傍に「宋太祖第二年号」とある】

17　黄陵廟前春草春　黄陵女児云々　賈与夫人別，命［レ］青衣以秋羅帕愎定命［二］丹五十粒［一］曰　此羅是織女【「青衣」右傍に「使者也」とある】

18　繰玉蚕織成　遇［二］雷雨［一］密収［レ］之，其丹毎［レ］歳旦　服［レ］一粒　可［レ］保［レ］一年，後大雨雷　見［レ］篋間一物如［レ］雲烟，騰空而去【「大」「雨」間に挿入符あり、「雷」右傍に転倒符ある。「大雷雨」にすべき】

一八二

1　詩話捻亀引東坡百斛明珠云　李群玉校書過二妃廟　題詩曰　小孤洲北浦雲辺　二女明粧共儼然　云々　又絶句

2　曰　黄陵廟前芳草春　云々　又曰　黄陵廟前春已空　子規啼血怨春風　不知精爽落何処　疑是行雲秋

3　色中　群玉自以第三篇春空便到秋色　踟躕欲段　二女俄出焉　群玉悉其所陳　而題於後　沙重湖　至【「段」左傍に「改」か】

4　潯陽　太守段成式素為詩酒侶　具述其事　後二年而群玉逝　段哭李詩曰　酒裡詩中三千年　縱横唐

5　突喧々　明時不作祢衡死　傲尽公卿皈九泉　又曰　曾説黄陵事　云々

6　勝覧　岳州部載此詩　莎草春作春草生　茜裙新作茜羅裙山長作天長

7　村云　一説　李遠得楊妃襪　恋［レ］楊妃　向［二］群［一］玉話［レ］之　云々　於［レ］是群玉賦［二］楊妃襪［一］　李遠賦［レ］黄陵廟　蓋互代其

8　人　説［二］其情［一］也　雖然未［レ］見［二］群玉襪詩［一］　唯傳説耳　此詩為［二］群玉詩［一］也

9　黄陵廟――莎草　任昉述異記曰　昔戰國時　魏國苦秦難有民従征役不返　其妻思之而既喪　塚上【戰（戦）】【國（国）】

10　生木　枝葉皆向夫所在而傾　因曰相思木　今秦趙間有相思草　状若石竹　節々相續　一名愁婦草

11　亦名嬬艸　人呼為寡婦莎　蓋相思之流也【艸（草）】

12　本草　莎艸　根味甘　微寒　一名□音号　一名侯莎其實名緹　一名香附子　一名雀頭香　生田野　二月八日【□「艹＋嵩」】

13　莎草春　葉唐卿過定林拜王荆公祠詩　拜了独行［二］松下路［一］　一池莎草正青苗　季潭　水西図詩曰

14　□□廟前莎草生　遺民磯下渓流洶，　蓋廟前必有莎草也　又證類本十　出澧州　莎草　然則【「本」「十」間挿入符あり、右に「草」。「證類本草」にすべき】【「洶」左傍に「滂　水勢盛」とある】

15　黄陵所産也

16　雪本云　莎有寡婦莎　恐用［レ］之歟　莎　韵書云一名侯莎　莖葉似三稜　根周匝多毛　謂之香附子　一名雀頭香

17　又愚案　御覧九百八十一云　魏文帝遣使於呉求雀頭香

云々　述異記同前

18 茜　本草云　一名地血　一名茹藘　一名蒨　陸□草木疏云　斉人謂之茜　州徐人謂之牛蔓也　増註　漢書云　貨殖【「茜」「州」間に挿入符あり、「徐」右傍に転倒符ある。「徐州」にすべき】【「漢書」右傍に「見下」とあり、右傍に ⊥ 印が見える。一八四6を見よ。】【□「王*凡」(璣)】

19 傳云　千畝云々　注　茜草　巵子　見于与會梔韵【畝(畝)】【与(韻)】【韵(韻)】

20 雪案　東坡百斛明珠云　李群玉校書過二妃廟　題詩云　黄陵廟前莎草春云々　誤作李遠詩　又一首云　黄陵

21 廟前春色空　子規啼血洒春風　不知精爽落何処　疑是行雲秋色中　群玉悉其所陳而題　後二年　群

22 玉逝　云々　又案　剪灯詩話成令言問織女曰　湘君夫人賢聖之□　群玉者何人　以淫奔之詞　溷黄陵廟曰　不知【□「衣+凡」(裔)】

23 精爽落何処　云々　自述奇遇　引皈其身　曰誕妄矯誣名検掃地　后土土之傳　唐人不敢指　近斥則天之悪故借名以諷也□

24 □同　又舟過黄陵廟詩云　黄陵廟下船凶倚　水浅沙平属玉双　山外断雲寒日晩　半篷残■雪下湘江　語勢【「下」「船」間に挿入符あり、「倚」右傍に転倒符ある。「倚船凶」にすべき】【■「霜」見せ消】

一八三

1 類唐而好矣　見于続三体詩并皇明詩選　小説開宝中有賈知――見于前　已上雪本【并(並)】

2 天隠箋註　為李群玉詩　履歴為群玉　唐音遺響為李群玉詩

3 梅云　莎字往々為沙字　誤矣　歌韵　蘇禾切　与蓑同音

4 莎草ハ　廟庭種之ハ　ハダシ　アシニテ　往来セン　タメ也　敬神之義也　幻謂此義穿鑿也

5 續翠講云　此詩得心　忘言　其情隠然言外　黄陵――言寸草マテモ　時ヲ得テ　面白シ　此辺　女　遊テ

6 ウツクシイ　コレニ　心ヲ　寄セタ　此女児ハ　愁モ

7 ナウシテ　歌テ　遊トモ　我カ　思コトヲハ　不知也　女児ヲ　群玉カ　念シタテハ　ナシ　愁殺人ノ　三■字ハカリ　群玉事也　群玉心ハ　如二女

8 慕舜　我亦慕如堯舜之君也　此心可也　四之句ハ　女児皆

9 去　群玉人一在廟前体也　水遠山長処ニハ　古今モ　青雲モ　遥ニ　隔テアル　事ヲ　云也　風雅集ニ　烟波清夢遠　吹不【「玉」「人」間に挿入符あり、「一」右傍に転倒符ある。「群玉一人」にすべき】

10 到王侯之心也　吾身不遇ナホトニ　青雲モ　遠也　カレ　コレ　水遠山長ハ　面白ソ　愁殺人トハ　別詩ニハ　ナイソ　又云　自

11 古賢人比女色也　蓋群玉自比二妃　賢而慕舜也

12 續翠云　此詩ハ　得意ホトニ　一二句ハ　忘声律也　村云　黄陵辺ノ女児トモカ　アカ子染ノ　ウツクシキ　裙ニテ　細キ腰ニ　ウツクシク　粧テ　遊也　女児ノ

美麗ナルカ　乗春出遊ヲ

13　見テ　ヤラ　アチキナヤト　思テ　トラエイデト　思タレハ　小舟ニ　ウチ乗テ　去ル　其跡ヲ　恋テ　見送レハ　水モ　遠ク　山モ　長シテ　次

14　第二　相隔ルホトニ　深愁也　愁殺人ハ　世話ニテ人コロシト云心也　女児ハ　上ニテハ　黄陵辺ノ　児女マテ也　下ノ心ハ　謂二妃也

15　落句ハ　アコカレタ皃　愁殺人ハ　又ハ　世話ニアラ人スカシヤト　云ソ

16　作此詩後ニ　夢ニミタソ　サテハ　其時ハ　茜裙新シハ　此カ　二女歟　此カ　申楽ニ　モタ如クソ

17　補云　一義云　日本申楽ニ　スルヤウニ　初ハ　女児ニテ　巫也　其後アマリニ　恋慕スルホトニ　夢中ニ　神体ト　現シテ　出ハ　即

18　已前女児也　其女児カ　唱歌去也　一義云　女児ハ二女ノ　御影ヲ　ツクリテ　ヲイタヲ　ミテ　アチキナケレトモ　吾ワ　舟ニ　乗テ

19　帰ホトニ　愁殺人也　雖［レ］然　軽舟短棹宇ハ　群玉ニハ　不相應也　女児ニ　云タカ　相應也　愁殺人ハ　蕉堅云世論也　云々【「蕉堅」右傍に「絶海」とある】

20　詩　云　春ニテ　面白ホトニ　遊女多出立イタハ　アワレコカレカ　神体歟ト　思ヘハ　舟ニ乗テ　小歌ニテ帰レハ　次第ニ【「カレ」、「カ」右傍に某字がある】

21　遠隔也　コレカ　カナシイソ　莎草ハ　思人草ニテハイラヌ事ソ

22　雪講　水遠山長愁殺人　如［レ］此読ヘシソ　江西点ト　云々　女児ハ　ミコ　カンナギ也　莎ハ　スケト云草ソ

23　黄陵――桃抄云　楚辞　湘君篇曰　采［二］芳洲兮杜若［一］　以遺［レ］下女　又湘夫人篇曰　搴［二］汀洲兮杜若［一］　将以遺兮

一八四

1　［レ］遠者　注曰　謂［二］夫人之侍女［一］　云々　今是ヲ　用テ　述不遇之意也　二妃ハ　不来トモ　セメテ　ツカワルヽ下女ノ　茜裙新ニテ

2　アルカ　コヨカシ　是レニ　物ヲ云ント　スレハ　不［レ］近シテ　軽舟短棹ニテ　去ソ　軽舟――群玉カ心ニ　唱歌去者ヲ　疑ソ　此舟

3　中ニモ　夢ニ　所見ノ　女モ　アルカト　思テ　舟ヲチカツケ　ヨカシ　物ヲ　云ワントスレハ　シラヌヤウテ　唱歌シテ　去ソ　百巻唐

4　詩　短棹作小楫　サレトモ　短棹カ　マシタソ　幻謂先賦此詩　後夢其人　蓋感于詩也　然則村義是　而桃之【「楫」左傍に「シウ」】

5　義非也

6　巵茜　漢貨殖傳　注　孟康曰　茜草　巵子　可［レ］用［レ］染也　師古曰　茜　音千見反　史記貨殖傳　注　徐廣曰　巵　音支【冒頭に「注」字あり、右傍に「印ある。一八二18を見よ。】

7 鮮支也　茜　音倩　一名［レ］紅藍　其花繒赤・黄也　詩會梔字注　通作支　云々　毛氏曰　右唯有支巵字　後人加【「花」「繒」間に挿入符あり、左傍に「染　脫乎」。「其花染繒赤・黄也」にすべき】【支（支）】

8 偏旁以別之

9 和云　古廟江濤秋復春　班々緑竹粉痕新　花間野鳥声鳴咽　疑是當初泣泪人　雪本

10 雪云　村菴云　此一句　謂彼女子之出遊時也　子

11 第一句言　処与時　第二句言　巫祝也　詩意謂有茜裙之女児　見之　則使人断腸　為之欲通言　則唱歌即去而雲

12 水相隔也　愁殺人　世話　日本所謂ヒトコロシ也　雪本

13 方輿勝覧三十三　潭州又長沙郡　云々　郡以長沙星得名　寰宇記引闕駰十三州記云　西自湘江　至東萊万里【「又」「長」間に挿入符あり、右傍に「改」。「又改長沙郡」にすべき】

14 故曰長　黄陵廟在湘陰北八十里　韓愈作廟碑云　湘旁有廟曰黄陵　自古立　以祀堯之二女　舜二妃者　庭

15 有古碑　乃晋太康九年　其額曰　虞帝二妃之碑　李白詩　洞庭西望楚江分　水尽天南不見雲　日落長沙秋色遠

16 不知何処吊湘君　養按　大明一統志巻之六十三長沙府部曰　黄陵廟在湘陰縣北四十里　漢荊州

17 牧刘表建　以祀舜二妃之神　昔舜南巡崩葬蒼悟　二妃娥皇女英尋之　不及　阮湘間　故立廟祀之　唐【「及」「阮」間に挿入符あり、左傍に「死」。「不及　死阮湘間」にすべき】

18 韓愈有記　杜甫有詩　五代馬氏重脩　本朝命有司　毎歳六月六日致祭【「記」左傍に「方輿　作碑」とある】

19 舜二妃墓　在黄陵廟西　唐高駢詩　舜帝南巡去不還　二妃幽怨水雲間　時當珠涙知多少　直到如今竹尚斑　同上【「間」「時」間に挿入符あり、「當」右傍に転倒符ある。「當時涙珠」にすべき】

〈異体字一覧〉（　）に通行体を入れた。なお、【　】において*印と+印で記すものを掲げない。また、操作困難なため、一部ユニコードには文字がないものも割愛した。

醫（医）　匀（韻）　韵（韻）　淵（淵）　徃（往）
華（華）　盖（蓋）　會（会）　雀（鶴）　乾（乾）
厂（雁）　氣（気）　宜（宜）　京（京）　况（況）
縣（県）　國（国）　支（支）　實（実）　珍（珍）
晝（昼）　穐（秋）　焦（隻）　醉（酔）　翠（翠）
節（節）　船（船）　戰（戦）　嘗（嘗）　曾（嘗）
藏（蔵）　續（続）　太（大）　臺（台）　當（当）
慱（博）　廟（廟）　并（並）　边（辺）　篇（篇）
畝（畝）　无（無）　刘（劉）　灵（霊）　廿（二十）
卅（三十）

〈付記〉本稿は2011年度中華人民共和国教育部人文社会科学研究一般項目（規划基金項目11YJA751047）「日本五山

僧的抄物『三体詩幻雲抄』中漢籍征引状況与室町時代的漢籍流布研究」並びに2015年度北京師範大学自主科研基金項目（00500-310422105）「日本室町時代的抄物資料『三体詩幻雲抄』与唐宋詩輯佚校勘研究」の研究成果の一部とする。

リュウ　レイ／北京師範大学外国語言文学学院　副教授

（二〇一五年十月三十一日受理）